

第387号 (令和3年5月6日(木)発行)

発行所

京都女子大学 宗教部

京都市東山区今熊野北日吉町35
電話 075 (531) 7074

華利陀

命根者何。
頌曰：「命根体即寿
能持煖及識。」

（世親造・玄奘訳）『阿毘
達磨俱舍論』分別根品



法学部准教授 西 義人

クマとドングリと菩薩道

ドングリ撒き問題

少し季節外れの話になりますが、秋になると京女の図書館のあたりには樹から落ちたドングリが転がっていますね。そのドングリが昨年の秋、東日本の一部地域で凶作となりました。それだけが原因とは断言できないものの、それらの地域では、山のドングリを秋の主要な食物とするクマ（ツキノワグマ）が人の生活圏へ頻繁に出没しました。その件数は過去五年で最も多くなり人身事故が続発、重傷を負った方も亡くなった方が出ました。そして、クマもまた多数捕殺されました。

そんな中、あるボランティア活動が話題になります。それは各地から集めたドングリをクマの餌として山奥に撒き、クマを山奥に留めて捕殺から守ろうという活動でした。実は、この活動は以前から行われていました。なおかつ、現場の専門家や研究者などから否定的な見解が出されてもいました。研究者を中心に組織されているNGO「日本クマネットワーク」のサ

イトではその論点がまとめられています。一例を挙げると、他所から持ち込まれたドングリが地域固有の遺伝子に影響を与える、あるいは害虫や病気などが一緒に持ち込まれる可能性があること。また、ドングリの豊凶は樹の元々の特性であつて、ドングリを餌とする生物が凶作のために減少することは、樹の繁殖にはむしろ有益な可能性もあることなどです。

そして、クマに限らず野生動物への餌やりは慎むべきという基本原則も挙げられています。それは、野生動物の行動を変化させて人との距離を望ましくない形で縮める可能性があるからです。出町柳のトンビや六甲のイノシシなど、身近にも例がありますね。

クマの場合は、人から餌を与えられたり人の生活圏で生ゴミを食べたりしたこと、食物に執着して人を恐れなくなり、人を襲った、あるいは捕殺された、という事例があります。現場の専門家は、人もクマも傷つけないという思いから餌やりストップを強く訴えています。

では善行としての餌やりをかなり強力に説いてきたからです。その代表例が、特に大乘仏教で重視されてきたジャータカです。ジャータカは、菩薩（ブツダ）と成る前の釈尊（ブツダ）が前世で限らない生まれ変わりを繰り返しながら善行を積み重ねてきたことを伝える物語です。

ジャータカで、菩薩はしばしば自己犠牲を伴う布施の行を行つています。たとえば捨身飼虎と呼ばれる有名な話があります。菩薩がある国の太子だったとき、餓えた虎の親子を救うため己の身を投げて与えたということです。法隆寺の玉虫厨子にもこの場面が描かれています。

仏教ではこれが尊い菩薩道として説かれるわけですが、今日の環境保護の常識からすれば、人を食べることを動物に学習させるなど、人の命を守るためににはもちろん、その動物の命を守るためにも絶対にしてはいけないことです。

ならばそんな話にはもはや封印すべきなのかといえ、それは思いません。現実の餌やり問題があることは、補足説明をすれば良いことでしょう。菩薩道の本質は、自己犠牲や餌やりといった行為が自己中心の執着を完全に離れてなされるという点にあります。菩薩は、たとえ他者のために自分の命を投げ出す時でも「私は善いことをしてあげた」という心は起こしません。そこが尊いのです。菩薩道の本質にある精神を伝えることは、むしろ餌やりという「善いこと」に執着しない柔軟な視点を提示することにもつながるのでないか、というのは期待しすぎでしょうか。

待しすぎでしょうか。一生もの課題 奈良の興福寺では毎年、不殺生の教えに基づき猿沢池に魚を放す放生会が行われています。従来はコイや金魚が放されたのですが、近年、それらは池にとって外来種なので生態系の破壊につながるという批判が寄せられていました。そこで興福寺は近畿大学農学部との協力ののもと、事前に捕獲しておいた在来種の魚を放流するという方法を昨年からはじめました。

「善いこと」であればこそ放つておけばやっつてしまう人が出るし、善意の行動を批判すれば感情的な反発を招くこともあります。餌やり問題が難しいのはこの点にあります。これについては仏教の責任も多々あるかもしれませんが、なぜなら、仏教

私は今、フランスの作家アンドレ・ジッドが、ドストエフスキーの作品について書いた評論を読んでいます。ジッドは、ドストエフスキーの作品の登場人物について、「智性や意志の一切は、彼等を地獄に突き落とすように見え」とか、「彼の最も危険な人物は、又最も知的な人間である」とか書いています。そして「意志と智性が善に向かつて努力しても、それ等の到達する徳は、偏狭な徳であつてそれは必ず敗滅に導く」とまで述べています。

普通、意志と智性が備わっているのは申し分なく、そういった人物が成功を収めるのではないかと私は思います。そういった人物が「善に向かつて努力」するのは素晴らしいことのように思います。

このようなジッドの考へは、仏教の示す人間の姿と共通するよう人間観に思えます。森田真田先生の『ひらがな真宗』には、「たいていの場合、自分が正しいと思つているもの同士が、争いになるものです」と述べられています。「人

口を出すな」でもなく、「魚を大切にすればいい」といふ全部やめよう」でもなく、科学的な知見を受け入れつつ仏教精神を伝える行事を存続していくにはどうするか。極論ではない現実的な方法を、興福寺ではその中で探る姿勢に、見習うべきところがあるように思っています。

興福寺ではその中で探る姿勢に、見習うべきところがあるように思っています。それに、不殺生といふのが外來種を人間の都合で選別駆除していいのかわからないという課題にも向き合うことになったといえます。

クマ対策も同じでしょう。どんな方法であれ、他の命を脅かさない完璧にきれいな方法などはあ

りません。多くの当事者はその事実に向き合いつつ、より良き道を探っているはず。本学の建学の精神・教育理念には「あらゆるいのちあるものの平等を自覚する」とあります。私はこれを読むたびに、理念にふさわしい行動ができていない自分を思い知らされます。その事実に向き合い、なおかつどうせ無理だと極論に逃げることなく、より良き道を探るという、菩薩を仰ぐ者にとって一生もの課題が、ここには込められているように思うのです。

親鸞聖人の誕生年が承安三年であることは、聖人自身が記しているから確実である。しかしその誕生日となると、最も古い記録でも江戸時代（宝永三年・一七〇六）までしか遡ることができない。一般に誕生日は記録が残りにくい。つまり、その誕生日が本当に四月一日（五月二十一日）であつたかどうかは、学術的には怪しいのである。

けれども「これは困つた。本学でも降誕会を執り行つてゐる。やめるか？」とはならない。親鸞聖人がいなかったならば、その教えに生き後世に伝えた人々（たとえば京女創立に尽力した三女性）もなく、その教えを建学の精神とする京都女子大学も存在しない。降誕会を祝つてゐるのには、浄土真宗という仏教を顕らかにした聖人が、この世に生まれてきたことそのものをお祝いしているのだから。その行事が、仮に学術的に不確かであるとしても、聖人の誕生日と伝えられる日に行われることは、自然なことといえる。

「ことばの窓」

②人間の姿

人間が罪深いとか、凡庸であるとか、自分で悪いとわかっている程度に過ぎない程度のことではない。人間は、又最も知的な人間である」とか書いています。そして「意志と智性が善に向かつて努力しても、それ等の到達する徳は、偏狭な徳であつてそれは必ず敗滅に導く」とまで述べています。

普通、意志と智性が備わっているのは申し分なく、そういった人物が成功を収めるのではないかと私は思います。そういった人物が「善に向かつて努力」するのは素晴らしいことのように思います。

このようなジッドの考へは、仏教の示す人間の姿と共通するよう人間観に思えます。森田真田先生の『ひらがな真宗』には、「たいていの場合、自分が正しいと思つているもの同士が、争いになるものです」と述べられています。「人

口を出すな」でもなく、「魚を大切にすればいい」といふ全部やめよう」でもなく、科学的な知見を受け入れつつ仏教精神を伝える行事を存続していくにはどうするか。極論ではない現実的な方法を、興福寺ではその中で探る姿勢に、見習うべきところがあるように思っています。

興福寺ではその中で探る姿勢に、見習うべきところがあるように思っています。それに、不殺生といふのが外來種を人間の都合で選別駆除していいのかわからないという課題にも向き合うことになったといえます。

クマ対策も同じでしょう。どんな方法であれ、他の命を脅かさない完璧にきれいな方法などはあ

りません。多くの当事者はその事実に向き合いつつ、より良き道を探っているはず。本学の建学の精神・教育理念には「あらゆるいのちあるものの平等を自覚する」とあります。私はこれを読むたびに、理念にふさわしい行動ができていない自分を思い知らされます。その事実に向き合い、なおかつどうせ無理だと極論に逃げることなく、より良き道を探るという、菩薩を仰ぐ者にとって一生もの課題が、ここには込められているように思うのです。

親鸞聖人の教えは様々なことに説明することができ、中でも感謝に生きることの幸せを身をもって示したところに、浄土真宗に限らない意義がある。感謝に生きる人は孤独ではない。親鸞聖人はまさに「感謝できる。感動できる。」人であった。（義

）

私は今、フランスの作家アンドレ・ジッドが、ドストエフスキーの作品について書いた評論を読んでいます。ジッドは、ドストエフスキーの作品の登場人物について、「智性や意志の一切は、彼等を地獄に突き落とすように見え」とか、「彼の最も危険な人物は、又最も知的な人間である」とか書いています。そして「意志と智性が善に向かつて努力しても、それ等の到達する徳は、偏狭な徳であつてそれは必ず敗滅に導く」とまで述べています。

普通、意志と智性が備わっているのは申し分なく、そういった人物が成功を収めるのではないかと私は思います。そういった人物が「善に向かつて努力」するのは素晴らしいことのように思います。

このようなジッドの考へは、仏教の示す人間の姿と共通するよう人間観に思えます。森田真田先生の『ひらがな真宗』には、「たいていの場合、自分が正しいと思つているもの同士が、争いになるものです」と述べられています。「人

口を出すな」でもなく、「魚を大切にすればいい」といふ全部やめよう」でもなく、科学的な知見を受け入れつつ仏教精神を伝える行事を存続していくにはどうするか。極論ではない現実的な方法を、興福寺ではその中で探る姿勢に、見習うべきところがあるように思っています。

興福寺ではその中で探る姿勢に、見習うべきところがあるように思っています。それに、不殺生といふのが外來種を人間の都合で選別駆除していいのかわからないという課題にも向き合うことになったといえます。

クマ対策も同じでしょう。どんな方法であれ、他の命を脅かさない完璧にきれいな方法などはあ

りません。多くの当事者はその事実に向き合いつつ、より良き道を探っているはず。本学の建学の精神・教育理念には「あらゆるいのちあるものの平等を自覚する」とあります。私はこれを読むたびに、理念にふさわしい行動ができていない自分を思い知らされます。その事実に向き合い、なおかつどうせ無理だと極論に逃げることなく、より良き道を探るという、菩薩を仰ぐ者にとって一生もの課題が、ここには込められているように思うのです。

親鸞聖人の誕生年が承安三年であることは、聖人自身が記しているから確実である。しかしその誕生日となると、最も古い記録でも江戸時代（宝永三年・一七〇六）までしか遡ることができない。一般に誕生日は記録が残りにくい。つまり、その誕生日が本当に四月一日（五月二十一日）であつたかどうかは、学術的には怪しいのである。

けれども「これは困つた。本学でも降誕会を執り行つてゐる。やめるか？」とはならない。親鸞聖人がいなかったならば、その教えに生き後世に伝えた人々（たとえば京女創立に尽力した三女性）もなく、その教えを建学の精神とする京都女子大学も存在しない。降誕会を祝つてゐるのには、浄土真宗という仏教を顕らかにした聖人が、この世に生まれてきたことそのものをお祝いしているのだから。その行事が、仮に学術的に不確かであるとしても、聖人の誕生日と伝えられる日に行われることは、自然なことといえる。

親鸞聖人の教えは様々なことに説明することができ、中でも感謝に生きることの幸せを身をもって示したところに、浄土真宗に限らない意義がある。感謝に生きる人は孤独ではない。親鸞聖人はまさに「感謝できる。感動できる。」人であった。（義）



草刈英治少佐のこと

文学部准教授 小林 瑞穂

「芬陀利華」の原稿依頼を受けて、何について書こうかと考えた時、真つ先に頭に浮かんだのは「草刈英治」のことであつた。草刈英治は日本海軍の軍人である。研究の關係で調べてからというもの、折に触れて草刈のことを思い出して考えるようになった。今回もまた草刈を思い出したのである。断つておかげにならないが、いわゆる「歴史上の好きな人物」というわけでも、彼の生き方に共感しているというわけでもない。(この時点

で「芬陀利華」の原稿依頼で求められた内容から離れている。ご容赦いただきたい。) 私がいつも考えることは、草刈の「苦悩」である。

草刈英治という人物の詳細を知つたのは、大学の博士前期課程在学中に出会つた『嗚呼草刈少佐』という文献による。私は海軍大臣隷屬機関の「水路部」について研究しているが、一九二九年にモナコで開催された臨時国際水路会議に、水路部長の米村末喜海軍少将と共に派遣されたのが海軍軍令部参謀の草刈英治少佐であつた。草刈について詳しく調べたいと思つて辿り着いたのが『嗚呼草刈少佐』であつた。

なぜ、「嗚呼草刈少佐」という文献が存在するのか。草刈英治は国際会議出席の翌年、一九三〇年五月二〇日に東海道上りの寝台列車で割腹自殺を図り亡くなつた。ロン

ド海軍軍縮条約をめぐつて紛糾していた時期であり、海軍軍令部参謀の立場にあつた軍人の死は衝撃を与えた。山下源太郎海軍大将および海軍軍令部長・加藤寛治による序文、海軍関係者による追悼文や回想を収録して出版された『嗚呼草刈少佐』は、海軍軍縮条約締結および政府の統帥権干犯に憤慨し、抗議のために自刃した草刈英治少佐というイメージを形成し、喧伝した。「楠木正成」「和氣清麻呂」「高山彦九郎」「軍神」。「嗚呼草刈少佐」では草刈を「忠君愛国」の歴史上の人物になぞらえて讃え、人格化する表現が多い。

先行研究において、『嗚呼草刈少佐』を出版した政教社や軍縮条約反対派が、草刈英治の死を反軍縮キャンペーンに利用している。また、これまで草刈の死の真相についても様々に考察されてきた。ロンドン海軍軍縮会議の全権を務めた海軍大臣の財部彪も同じ寝台列車に乗車していたことから、草刈が財部海相を暗殺しようとして失敗したとする説もある。

実際の草刈の死は不可解である。背広姿で京都駅から東京行き寝台急行に乗車した草刈は、東京駅まで乗車する旨を乗務員に告げると、そのまま寝台に入った。富士駅を通過した頃、給仕の係員が寝台の異変に気付く。寝台のカーテンを開けると、そこには「海軍制帽をかぶりパジャマを着た

妙な格好」(軍掌の証言)で、海軍の短剣で自刃を図つた草刈がいた。草刈は意識があり、受け答えができる状態だつた。軍掌が短剣を取り上げようとする。「この剣をとらなくては俺の死が無意味になる、判らなくなる」と騒ぎ、軍掌が「どなたですか?」と名前を尋ねても答えようとしなかつた。草刈は搬送先の沼津の病院で死亡した。日ごろから仏教思想に触れ、禪に傾倒していた草刈は、乗車前に京都・妙心寺の西山宗徹を訪ねたことになつてはいたが、実際は面会していなかつた。事件後に宗徹は「草刈少佐という人はちつとも知らない」と答えたという。草刈の行為が、軍縮反対派の主張するように「海軍軍縮条約と統帥権干犯に憤慨した末の死」であつたならば、「寡黙」「真面目」と評された草刈の性格上、場所と服装、遺書なども注意を払つて準備するのでは?と疑問が残る。寝台列車の様子からは、何事かに悩んで思いつめ、突発的に自刃

お知らせ

✦ 宗教部文書活動のお知らせ ✦

令和3年度の宗教部カレンダー(吊下げ型・卓上型)が出来ました。当カレンダーは味わい深い法語と、本学の絵画部が作成した絵画を組み合わせた内容となっています。皆さんが参加しやすいように、宗教教育センターが実施する年間の各行事も日程に入れています。カレンダーは宗教教育センター(L校舍3階)カウンター他ブックコーナーに置いてありますので、ぜひ皆さんも普段の生活にご利用ください。

『般若心経』

安田章紀

「般若心経」のお経の名前を耳にしたことがない人は、ほとんどいないと思えます。なかには、法事などで読んだことがある人もいるかもしれませんが、なぜこのお経はここまで有名なのでしょうか。それは、やはり手ごろな長さにあると思えます。「般若心経」は250字程度の短いお経です。他のお経に比べて圧倒的に短いゆえに、親しみやすい。これが、このお経が現在に至るまで愛されていることの要因ではないでしょうか。

しかし、このお経の意味を理解している人はどのくらいいるのでしょうか。何やら小難しげな漢字が並んでいて、意味なんてさっぱり、というの

が大方の実感でしょう。かく言う私も、確かに字面の解説を足し合わせた結果は差し引きゼロ、これが「不増不减」ではないかと思ひます。若さが減れば、私たちは身体がちこちこに病氣やら故障を抱えることになりま

た、日頃から考えていることの一端をここに書いてみたいと思ひます。私がよく思ひ起すのは、このお経の「不増不减」という一句です。つまり、「増えない、減らない」。正確には「何もかも、実際のところは、増えもしない、減りもしない」という意味です。

たとえば、人間が年老いていくことを考えてみましょう。誰も一日、一日と年老いていっています。年を取るなんて

まっぴらごめんだ、と思つている人もいるでしょうが、現実には残酷です。年を重ねるとは、年齢が「増えること」です。と同時に、「若さが減ること」でもあります。そして、両方を足し合わせた結果は差し引きゼロ、これが「不増不减」ではないかと思ひます。

若さが減れば、私たちは身体がちこちこに病氣やら故障を抱えることになりま

法のことば

命根者何。頌曰..

「命根体即寿 能持煖及識」。

(世親造・玄奘訳「阿毘達磨俱舍論」 分別根品)

命根とは何か。頌に(次のように)ある。「命根の本質は寿命に他ならない。体温と識とを保持するものである」と。

仏教における基礎学である「阿毘達磨俱舍論」の「いのち」の定義です。命根(生命機能)は体温と識(外界からの様々な刺激に対する反応)があること。感情や善悪の心は識に付随して生じるため、その条件とはなりません。

「いのち」とはいつまでいかなのでしょうか。目にはみえないし、手で触れることもできない。失われたことだけ分かるものです。ただ、一人一人に分け隔てなく与えられているものでもあります。ただ、仏教では右記のような教理的な定義もあれば、「必ず救われてゆくのち」という物語もあります。人間である限り向き合わざるを得ない問題に、仏教の叡智は示唆を与えてくれると思ひます。

(中西 俊英)

これは推測の域を出ない私見であるが、当時の海軍軍令部そのものが草刈を失望させた一因だつたのではと考えることがあ

シリーズ 智慧の蔵 37

『ガンダーラ美術にみるブツダの生涯』

栗田 功著 二玄社 二〇〇六年

私が小学生のある時期、平日の夕方、下ラマ西遊記の再放送がやっていた。堺正章さんが孫悟空、岸部四郎さんが沙悟淨、西田敏行さんが猪八戒、そして夏目雅子さんが「おっしょよん」こと三蔵法師の配役であつた。

そのドラマのエンディング、テーマ曲がゴダイゴの「ガンダーラ」であつた。当時は気にもとめなかつたが、二十歳を過ぎて仏教を学ぶようになってからは、このガンダーラという名に特別の魅力を感じていく。なぜなら、ガンダーラは釈尊の滅後、仏教がインド各地に伝播する中で特に大きな役割を果たした土地の名だからである。

ガンダーラは、現在のパキスタン、ベンガル盆地の東部、アフガニスタンの東部、イランの西部の間にあつた。この地域は、紀元前後の数百年間は仏教の大

ブツダの生涯

ブツダの生涯